

社長対談◎観世九臈会

観世九臈会理事・能楽師

NTTコムウェア
代表取締役社長

観世 喜正 氏

海野 忍

当コーナーは、NTT コムウェアのお客さまをゲストにお迎えし、
お客さまの事業動向をお聞かせいただくとともに、当社への期待などもお伺いしていきます。
今回は、能楽師の観世喜正氏に、お話を伺いました。(本文中敬称略)

観て、聴いて、楽しみ、そして習う
古来の伝統を受け継ぐ「能の世界」をさらに発展させる

伝統文化の中に新たな革新を

海野：伝統芸能の世界にお生まれになっただけに、幼少のころから能というものを意識されていたと思います。初めてのお稽古や初舞台の思い出として、印象深く残っていらっしゃることはおありでしょうか。

観世：初舞台は、2歳半のときでした。略式の上演形態である「仕舞(しまい)」という形での舞台でした。演目名は『老松』です。「老いた松」と書くだけあって、本来は老人が主役の曲なのですが、子どもの初舞台にもよく上演されます。めでたい内容であることと、後半部分が舞台をぐるりと1周するくらいの短い所作で済むためです。ただ私も、その舞台はまったく記憶にございません。それどころか、稽古したことすら覚えていません。それなのに、なぜ初舞台の演目がわかるのかというと、小学校に入学したばかりのころ、姉たちがこのときの写真を見せてくれたからです。子ども用の黄色い袴を着て舞台に立つ幼い私と、その背後から介添えをするように見守っている父と祖父が写っていました。そのときの私の謡を録音したカセットテープも聞かせてもらいました。子どもですから、「ちゃちしゅちえちよ」みたいに、舌がうまく回っていない謡でしたね。残念ながら、そのカセットテープはいつの間にか紛失してしまいました。



伝統芸能の世界の人材育成術

海野：きっとお客さまも拍手喝采だったことでしょうね。今でも覚えていらっしゃる最初の稽古はどんなことをされたのでしょうか。

観世：幼稚園だと思います。稽古の前には、必ず指をついて、「お願いいたします」、終わったあとは「ありがとうございました」と、挨拶をするように指導されたことをよく覚えています。教えてくれたのは父ですが、子どもの目から見ても「甘い」と思えるほど優しい性格でした。ときどき、伝統芸能の家庭を描いたドキュメンタリーやドラマなどで、子どもが泣きだすほど厳しく指導するシーンを目にしますが、そういうことはまったくありません。私のやる気がなくなったら、そこでその日の稽古はおしまいです。そもそも無理強いしたせいで子どもが「嫌だ、出ない」と言い出せば、舞台が成立しなくなってしまいます。上手い下手は後回しにして、まずはきちんと舞台をやりおおせるための稽古という意味では、私にあっていたように思います。今、私は6歳の娘を指導する立場になりましたが、父から受けた教え方を踏襲しているかという、そうでもありません。娘は気が強い性格なので、「駄目じゃないか」と指摘すると闘志に火がついて、「頑張りたいのでもうちょっと練習する」と言ってきます。私の子どもころに受けた緩い稽古とはぜんぜん違います。

海野：企業人の立場から申し上げますと、相手の性格に合わせて指導法を変えるというのは、上司が部下を育成するときにも通じるところがあると思います。

観世：子ども自身が「もうちょっと上手にやりたい」と思っているのなら、レベルの高いことを教えます。でも、「特にやりたいわけではない」「長くて嫌だな」などと思っているときには、その思いを打ち消してあげることが何より大切です。能の舞台で子どもが演じるのは、ピョンピョン飛び跳ねたり、チャンバラで活躍したりするような楽しい役ばかりではありません。1時間ずっと座りっぱなしの役もあります。そういう役でも舞台で最後までまっとうできるようにするには、“鞭”だけでは無理です。ときには“あめ”も与えてあげないと。必要に応じて使い分けをしています。

新たなファン層の開拓に尽力する

海野：職業として能の道を選択すると決心されたのは、いつごろでしょうか。

観世：大学4年生のときです。4年生になった途端に友人たちはみんな就職活動に忙しくなり、学校に行っても友人がいなくてつまらない。かといって自分も友人たちと一緒に、企業に面接に行くかといえば、そんな気も起こらない。「では、これからどうするんだ」と考えたときに、「自分は能の道で生きていく」と再認識しました。子どもころから漠然と思い描いていた将来像が、このときははっきりと形づくられたというわけです。

海野：平成5年に大学を卒業していらっしゃいますが、昔と違って伝統芸能の家でも、お子さまを大学に通わせるところが増えてますね。

観世：大学に通わせてもらったことは、本当に感謝しています。おかげで世界が広がりました。高校生のころは、「同世代には能に興味を持っている人なんかいない」と勝手に思い込んでいましたが、多様なバックボーンをもつ友人たちと話しているなかで、実際には伝統芸能に関心を持つ若者も少なくはないし、外国からも注目されていることに気づくこともできました。

海野：IT業界でいうオープン化ということでしょうか。このオープン化が普及を牽引しているようですが、伝統芸能の能の世界では普及に向けた開拓はいかがでしょうか？

観世：渋谷区にある国立能楽堂で中高生向けの公演を定期的に行っていますし、幼稚園児や小学生向けに上演することもあります。外国人向けの公演は、テレビの国際ニュースにも取り上げられました。また、学校の体育館や講堂を巡回公演することもあります。私たちやそれ以上の世代では欧米の文化への憧れが強かったように思いますが、その反動なのか、今の子どもたちは、和の芸能や伝統文化に素直に興味を示すのです。そのような世代が出現するとは、かつては想像すらできないことでした。やはり子ども向けの公演というのは、これからも続けていかなくてはならない。そんな思いをさらに強くしています。

伝統芸能の世界にもIT技術を



観世 喜正 氏

1970年東京生まれ。慶應義塾大学法学部卒業。父・三世観世喜之に師事し、幼少より能楽師としての研さんを積む。東京を中心に、全国の公演、海外公演に多数出演。普及活動にも力を注いでおり、謡曲のCD化、能公演のDVD作成など、能楽教材のソフト化にも積極的に取り組んでいる。著書に『演目別に見る能装束』（淡交社）。

今後は能の世界にも IT技術の導入を 進めていきたいですね

くても、能は誰でも習うことができるのです。ちなみに、今習っていらっしゃる方の中では、女性が圧倒的に多くなっています。習ったうえで能を観ると、より深く理解でき、楽しみも増すはずです。

海野：観世さまは、たくさんの人に能をより楽しんでもらうため、新しい技術導入にも取り組んでいらっしゃいます。

観世：この矢来能楽堂が作られたのは、昭和5年（1930年）と聞いております。そして昭和27年（1952年）の祖父の時代、今の建物に立て替えたときに、桟敷席ではなく、当時としては先進的といえる椅子席を導入しました。電気による照明や、椅子に座っての観劇という形を導入したことで、能の長い歴史のなかでは技術革新といえます。今後はタブレット端末やスマートフォンの活用法、さらには字幕表示機の可能性などについても検討していきたいと思っています。

海野：能の伝統はどのように作られ、続いてきたのですか。

観世：能は14世紀の中ごろ、観世の家の初代、2代となる観阿弥、世阿弥が大成したものです。それ以前も神社仏閣での祭礼儀式に演じられていましたが、台本を用意し演出を加えて、演劇のようなスタイルに昇華させたのは、観阿弥、世阿弥の功績です。江戸時代には武士のたしなみの一つとされ、公式行事の際に上演されました。あの赤穂浪士で有名な、松の廊下の刃傷事件も能を上演している最中に起こったものです。明治になって一度は、新しい時代に能は不要と見なされ廃れかけたのですが、岩倉具視が「外国にはオペラなどの接待があるが、日本にはない。いや、能があるではないか」と復権に取り組みました。

海野：観世さまから見て、能の魅力はどのようなところに感じられますか。

観世：能は演劇ですので、当然、誰でも観ることができます。そして能楽堂だけではなく、神社、お寺のような場所でも上演されます。また、本物のかがり火の明かりに照らされて演じられる薪能のようなスタイルもございます。このように能を通して、さまざまな形の、すてきな和の空間を満喫できます。つまり、観て聴いて楽しむことができるわけです。そして、習うことができます。これは意外に思う人が多いのですが、私のような能楽師の家系に生まれな



多くの人が能をより深く
楽しんでもらえるよう、
技術面でご支援いたします

社長対談◎ 観世九阜会

海野：字幕表示機といえば、弊社ではタブレット端末向けに「多言語字幕解説システム」を開発しています。昨年9月にはここ矢来能楽堂でサービスのトライアルも実施させていただきました。お使いいただいた感想はいかがでしょう。

観世：私も歌舞伎を見ることがあります。私は歌舞伎のセリフをかなり聞き取れるほうですが、それでもときどき何を言っているのか、この役者が誰なのかわからないこともあります。そんなときタブレットを見れば、役者の名前が表示されるというように、今ちょっと知りたい情報を補ってもらえるようになればいいですね。

だからといって一から百まですべての情報はいりません。もちろんすべての情報はコンテンツとして必要でしょうが、見る方からすれば、すべて説明されては逆にうっとうしいと思うかもしれません。見る側で情報を取捨選択できるといいですね。

海野：それは私ども技術屋にとって、大変いいヒントです。私たちは「なるべくフルセットをお使いいただこう」と思ってしまうのですが、なかには、「本当にほしい機能がひとつだけあれば十分」という方もいらっしゃいます。取捨選択できることが大事ということですね。

観世：そうですね。そういう使い方ができると、より理解が増すのではないのでしょうか。

海野：ありがとうございます。この機会にぜひこれからも、ご指導をよろしくお願いいたします。

[対談日：2016年7月14日]



CORPORATE PROFILE

名称：矢来能楽堂

所在地：東京都新宿区矢来町 60

設立：昭和 27 年 (再建)



NTT コムウェア株式会社

URL：http://www.nttcom.co.jp/

WEB 掲載：2016.9